

## 京都府自殺対策推進協議会計画部会(第1回) 開催結果

■日時:令和7年度9月18日(木)13時半~15時(オンライン)

会場は、府庁旧本館第1会議室

■出席:6名(別紙のとおり)

### ■計画部会長の選出及び部会長代理の指名等

- ・京都府自殺対策推進協議会規則(第4条第3項)に基づき、委員互選により三木委員を部会長に選任
- ・三木部会長から、同規則第4条第5項に基づき、部会長代理として金山委員を指名

### ■議事

第3次京都府自殺対策推進計画の施策の方向性(案)について

(事務局から資料に基づき説明)

<質疑応答・主な意見>

(各委員)

- ・子ども・若者といっても10代前半・後半、20代前半では状況が異なる。全国的にも、子ども・若年層の自殺の要因分析は進んでいない状況。
- ・子ども・若者の自殺の原因自体を調べるより、不登校や虐待という自殺のバックグラウンドに対応する方がいいのではないか。子どもの発達状態や家庭問題等の要因も大きく、特に低年齢の子や虐待環境にある場合は「死にたい」という気持ちを表現する言葉自体簡単に出てこないと思う。
- ・スクールカウンセラーは学校のニーズや状況に応じて対応しているが、団体としても、自死の問題を含む研修等のノウハウもあり、団体として期待されている役割を伝えていくことはできる。
- ・資料の中に、行動化ということがあったが、頭痛や腹痛といった体の不調を訴える身体症状も、精神的なしんどさを伝える重要なサインとなる。このようなことに気づくことの大切さも、計画に盛り込んでもよいのではないか。
- ・学校以外にも、地域での居場所や相談も含め、様々なところで支援できるような体制づくりや、学校と地域が連携し、支援していくことも必要。
- ・自殺未遂者支援では、情報や支援を丁寧につなぐことが大切で分野を超えた予防的対応に取り組んでいる地域もある。未遂者支援では消防、地域の福祉分野、医療との連携が重要。
- ・(未遂者の連携には)本人同意が前提となるが、搬送時に同意を得るのは困難。同意を得られない場合でも、同居家族等に役場などへの相談を打診する形で、その後の受診や生活の構築を調整するという形で対応している実情である。
- ・子ども若者への自殺対策の強化のところで、特に小中学生は、保護者の状態などにも影響されることも多いため、保護者に対する支援や、保護者が安心できる環境づくりといった観点も入れていただきたい。
- ・大学では、学校やサークル等で人との繋がりを持てる人と、持てない人がいる。人との繋がりから外れてしまう人がいる現状に対してどのように対応していくのかが重要と思われる。
- ・若者は死にたいとかいう言葉を、注目を浴びるためだけに簡単にSNSで発信することもあり、深刻さが図りづらい。本当に辛さや痛みを抱えている人に対して、アプローチすることが重要と考えられる。
- ・コロナ禍の休校の時期に幼稚園、保育園に通っていた子どもたちが、現在、小学校の三、四年生になっているが、現在、不登校の子が急増している。不登校の若年化はコロナ禍でコミュニケーション機会が減少したこと

の影響等と無関係ではないと思う。

- ・コロナ禍で得られなかったコミュニケーションスキルを、何と関わり、どういった経験を経て身につけさせていくか、といったことが今後の学校の課題になると感じている。
- ・妊婦で産後の鬱や周産期で精神疾患が発症される方は多く、家族だけでは支えきれない。一方、妊産婦に対する様々な支援は増えてきており、妊婦になられた時点や周産期でのスクリーニング等、支援体制が国の指導のもとで構築されてきていると思う。そこに繋がらない人たちに対して行政としてどのような仕組みを作れるかが今後の課題。

(委員から質問)

- ・学校現場での希死念慮、自傷行為の児童生徒は増えている印象はあるか。

→(委員から回答)

小中学校では、児童生徒に向けて、「自殺」そのものをテーマとして扱うのは難しく、「命を大切にする」、「自己肯定感を育む」といった内容で、総合的な学習の時間などを通じて学びを行っている。

(京都府から回答)

- ・京都府では、今年7月から府市連携により、妊娠・出産・子育て等に関する相談を一本化し、SNS相談等を行っている。また、産前産後ケア専門員等の配置も各市町村と連携して進めてきたところだが、繋げていかないと支援が届かない方へのアプローチは課題。
- ・自殺死亡率の計画目標値は、ただゼロと書くと、その死にたい方の気持ちを否定するのではという意見もあると思う。死にたいという辛い気持ちを受けとめながら、少しでも減らしていくことを目標としたい。

(各委員)

- ・自分を責め、死にたいという気持ちを持つことは否定できず、嫌なことがあったら死にたい気持ちが出てくるのも当然。子どもも大人も、様々なマイナスな感情の側面を持ちながら、どのように生きるのかといった、メッセージも何らか入れることができればと思う。
- ・今、命を絶つしかないとか、追い込まれている状況の方に対して、社会、地域、身近な人たちの関わりがきっかけとなり、少しずつ変えていけるというメッセージも含めたいと思う。
- ・子どもといっても、年齢に応じて、予防的な対応も変わって来る。  
小学生は、自分から辛い気持ちを言えないこともあり、周りが異変に気づき、悩みや困りごとに対応してあげることが必要。  
高校生は、自分の辛さや聴いてもらいたいと、あえて積極的に冗談めかして話してくる場合もある。彼ら彼女らは、自身の話しを周囲の者が本気にせず、受け止めてくれないことが一番つらく、行動化して自死を招くこともある。
- ・死にたい気持ちをカミングアウトできず、誰にも打ち明けられないということは危険な状況。  
カミングアウトできる環境、寄り添ってくれる人が必要。

(京都府)

- ・京都府自殺ストップセンターでも、死にたいという方からの相談を受けとめた上で、行動化しないように対応を行っている。そこから、より相談できる身近な人に結びつけるように進めていければと思う。

(以上)